

# 日本現存『類合』及び関連資料の考察（一）

楊慧京

はじめに

朝鮮王朝時代、児童用漢字学習入門書として『千字文』の次に用いられたのが『類合』である。『類合』の諸本系統についてのあらましは安秉禧氏を始め、近年の韓国では孫熙河氏、日本では藤本幸夫氏の研究によって知ることができる。また『類合』に収録された標目漢字とその漢字音及び字訓のテキスト研究も進んでおり、主として韓国語史研究の貴重な用例として利用されている。

しかし、文字史・表記史の観点からの分析となると、十分になされているとはいえないように思われる。特に日本に所蔵される『類合』の伝本が少なくないにも拘わらず、朝鮮半島からの受容の全貌がなお明らかではなく、国内諸本の整理もおこなわれていないために、日本に現存する『類合』がほとんど活用されていないのが現状である。

本稿は朝鮮で漢字入門書として使われた『類合』について、筆者が現在確認できた日本現存の諸本を紹介し、その伝来の経緯について述べる。あわせて『類合』関連の newly 資料も紹介する。ただし、紙面の制約から今回は書誌情報に止まり、新出資料

に対する本文調査や、諸本間の異同に関わる考察は稿を改める。

## 一 『類合』とその作者について

### 1 「必先千字、次及類合」

『類合』の成立と刊行に時期については明らかではない<sup>(1)</sup>。藤本（一九九〇）が指摘したように、『朝鮮王朝実録』の「中宗十年」に『類合』刊行に関する記録があり、『中宗実録』十二年（一五一七）丁丑四月戊午条に、「千字已畢、類合半読」（世子が『千字文』をすでに終え、『類合』を半分読んだ）という日記の記録がある。また『訓蒙字会』<sup>(2)</sup>（一五二七）の序に「臣見、世之教童幼學書之家、必先千字、次及三類合」とある記録を合わせると、『類合』は十六世紀前半には王族や両班らの子弟の識字教科書として使われていたことが確認できる。

朝鮮王朝での『類合』に類する初学者向けの漢字語彙集には右の『訓蒙字会』（一五二七）の他に、柳希春<sup>(3)</sup>『新增類合』<sup>(4)</sup>（一五七六）が存在する。これより古く、中国・梁の周興嗣（五二一没）が著した『千字文』は東アジアの国々でもっともよく

使われた識字教科書であり、後に書道でも臨書の教材として使われた。一句四字、計二百五十句千字というコンパクトな形式ではあるが、周知のように「知識人としての最低限の教養として知っておくべき故事や成語などを多く載せた」<sup>(5)</sup>ものである。ところが、背景文脈や知識ともにある『千字文』は、朝鮮半島の両班の子弟といえどもやはり理解しづらい部分が多い書物でもあった<sup>(6)</sup>。

一方で、『類合』は最初から朝鮮人によって編纂された<sup>(7)</sup>ものであり、漢字を類目ごとに分類して標目字として掲げて、その下に朝鮮語の訓と音を並記する簡便なものである。『爾雅』のような整然とした語彙分類ではないが、「教字」「天文」「地理」など語彙の類が取り合わせられてまとまりをなす『類合』の本文は、『千字文』に比べて教養としての面白味が相当に減ったのも事実だが、その分、関連語彙の漢字を通覧できるために、漢字という文字を習得する実用面に特化したものだともいえる。日本の『色葉字類抄』や『節用集』のように必要に応じてその都度用いる字書というよりは、初学者が最初に文字を学ぶに際して、関連語彙がまとまっており、なおかつ基礎語彙とでもいえるべき日常語彙を中心にした文字学習教材としてある。この点で『類合』は、朝鮮の児童の啓蒙段階で最も適切な漢字入門書だったといえよう。さらにいえば、『類合』と『千字文』では約六百字が重複するから、『千字文』を学んでから『類合』を学ぶ中で重複した六百字を復習しつつ、新たに『類合』によって九百字を学ぶことになるため、「千字已畢、類合半読」というのが世子の記録として残ることの意味は、その高い学習効果を確認することであろう。

朝鮮語母語者の手によって作られたこの書物には、朝鮮漢字音と字訓がより強く反映されており、朝鮮半島固有の訓読を知らずで大きな価値を有していると考えられてきたが、しかし学習者の日常生活に合わせて、方言に由来する字訓も多く混じっているため、字音と字訓の表記に異同が少なくない。利用者による改編が比較的容易であるという性質は『千字文』とは対照的に、『類合』が実用書としてあつたことを示すけれども、それだけに板元や書き手による漢字表記の字体差も小さくない。

## 2 作者について

『類合』の作者については主に未詳説と徐居正<sup>(8)</sup>説とがある。『訓蒙字会』(二五二七)の著者・崔世珍(一四七三頃―一五四二)は序文に「類合之書、出<sub>レ</sub>自<sub>二</sub>本國<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>知<sub>三</sub>誰手<sub>一</sub>也」と記し、『類合』の作者は未詳とした。同じく柳希春も『新增類合』(二五七六)の序文で「臣伏観、類合一編、出<sub>三</sub>於我東方<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>誰手<sub>一</sub>……(私が思うに『類合』という書物は我が朝鮮王国にて作られたものだが、いったい誰が書いたものかはわからない)」と記して撰者を不明としている。一方、丁若鏞(一七六二―一八三六)<sup>(9)</sup>の『雅言覚非』(一八一九)には朝鮮王朝の著名な文人である徐居正を『類合』の作者と見做す記述がある<sup>(10)</sup>。また近年、朝鮮王朝第十四代国王宣祖の嫡女である貞明公主(一六〇三―一六八五)が筆写修補した『類合』が紹介され<sup>(11)</sup>、その跋文に『類合』の作者は徐居正であるとの記述<sup>(12)</sup>がある。この跋文を書いたのが貞明公主の孫の洪重福(一六七〇―一七四七)であることからすれば、当時知識人層を占める

両班の中でも広く徐居正著説が流行ったことから、前述した丁若鏞の他にも出所があったと考えられる。

ところが近年の研究史においては作者について、柳希春と崔世珍よりはるかに後の人である丁若鏞が言及した『類合』の著者に関する言説は信頼できないという朴亨翌(二〇〇四)の見解があり<sup>(十三)</sup>、また藤本(一九九〇)は、博識で好書家である柳希春と崔世珍の文であるだけに『類合』は朝鮮で作られたというのはかなり大きな信頼性をもつと考えられると指摘し、徐居正説にも納得できるところがある<sup>(十四)</sup>という主張もある。なお判然とはしないが、徐居正説を否定する積極的な根拠も乏しく、かといって肯定する資料もない現状としては、ひとまずは作者未詳とするほかはないだろう。

## 二 『類合』諸本

### 1 これまでの諸本研究

前にも触れたように『類合』は韓国の言語と方言の歴史を研究するための重要な資料として知られている。筆者の調査では『類合』に関する最初の研究論文は方鍾鉉(一九六三)『類合』の解題<sup>(十五)</sup>である。この方氏論文の発表当時、韓国国内では『類合』完本はまだ確認されておらず、方氏は日本で資料調査をする際に『類合』完本の存在を知り、『新增類合』と柳希春の關係記録から『類合』を紹介することを意図しての解題であった。これ以降『類合』七長寺本の韓国国内新出資料紹介の論文はあったが、資料単体の紹介に止まり、系統的な全貌はまだ明確で

はなかった。

一九七一年に李基文が『訓蒙字会』の研究に際して『類合』との関係を紹介し、当時『類合』に言及する場合は『新增類合』と単巻『類合』の両系統を指すと述べ、単巻『類合』は『新增類合』以前の旧本だと指摘した。

一九七二年刊行の檀国大学校附設東洋学研究所編『東洋学叢書』所収『新增類合』の解題<sup>(十六)</sup>に『類合』を紹介して初めて諸本系統がまとめられた。この解題では『類合』に仙巖寺本、七長寺本、松廣寺本など十余種の伝本が存在し、その中で「康熙三年〇〇」と刊記がある七長寺本が最も古いと安氏が明示した。資料の系統分類については今までの主張を受け継いで、『新增類合』を「新增本」、そして『類合』を「旧本」と称した。

その後、藤本(一九八六)が大東急記念文庫に漢字だけで書かれている『類合』を発見し、十六世紀後半(壬辰倭乱前)にできたと判断し、見出し字の異同から仙巖寺本、七長寺本、松廣寺本等を含めた「旧本」系統に属すと述べた。同じく藤本氏は十九世紀から二十世紀初頭までにはできたと推定できる三種の刊本を紹介し、その後一九九六年には貝原益軒<sup>(十七)</sup>『千字類合』<sup>(十七)</sup>は漢字本『類合』を参考して作った書物と指摘してその出版状況を紹介している。

これらをつまみ、安氏は一九九二年の論文において『類合』の系統を「注釈本」と「漢文本」に分けた。安氏によれば、見出し字の下に音注と訓を施した注釈本はいずれも十七世紀後半以降のものであり、漢文本は大東急記念文庫本以外に韓国国内の寺院にもあるが<sup>(十八)</sup>、大東急記念文庫本より後代のもので、数字「百」と「千」の表記を大字「佰」「仟」とした点から、

漢字のもつとも正しい字体を示したのが大東急本と靈長寺本であると興味深い指摘を述べた。今後の新出する資料と合わせて検討する余地はあるが、合理的な見解だと思われる。

崔世和（一九九三）は、『類合』には「諺釈本」と「漢字本」が存在すると主張し、韓国に現存する刊行記録に基づき、未詳とされた寺利本を紹介し、無刊記の寺利本の年代を推定した。崔氏によれば七長寺本、松廣本、仙巖寺本は字音と字訓の誤刻と缺刻、版面の磨滅それに落丁があるが、松廣本が比較的善本であると述べた。また三種での漢字の字体が運筆上非常に似ており、共通点としては筆画が「瘦勁」であると評価した上で、異同が著しい十八字を取り上げて、七長寺本と仙巖寺本の類似性が一番高いと述べた。

二〇〇〇年以降、最も全面的な研究の一つが朴（二〇〇四）の研究である。朴氏は調査可能なすべての伝本をまとめ、さらに諸本間での表記の相違について網羅的に指摘し、さらに『類合』の編纂者が教授しようとした「文字」と「語彙」に焦点を当て、漢字に対しておこなった選択を重要な問題として、本書の性質に関する検討を試みた。

近年では孫熙河（二〇〇八）と孫（二〇二〇）が新出資料である治洞新板系統を考察し、孫（二〇一六）では後述するシーボルト本の書誌と語彙特徴を紹介し、文末に韓国現存の諸本を並べた。

先行研究と合わせて、以下のように諸本をまとめることができる。

刊本	時期	字数	種類
大東急記念文庫本	十六世紀後半	一五二二	不明
七長寺藏板本 <sup>(十)</sup>	一六六四	一五二二	寺利本
安心寺本	十七世紀中葉	一五二二	寺利本
仙巖寺新刊本 <sup>(十七)</sup>	十七世紀中葉（?）	一五二二	寺利本
靈藏寺書刻本 <sup>(十七)</sup>	一七〇〇	一五二二	寺利本
松廣寺開刊本 <sup>(十七)</sup>	一七三〇	一五二二	寺利本
シーボルト本	一八三八	一五二二	洋書
平隱齋藏板本	十八世紀中葉末葉 <sup>(?)</sup>	一五五四	坊刻本
武橋新刊本 <sup>(十七)</sup>	十九世紀中葉	一五二二	坊刻本
治洞新板本	十九世紀中葉	一五二二	坊刻本
戊申刊板本 <sup>(十七)</sup>	十九世紀中葉末葉	一五二二	坊刻本
刊年未詳本 <sup>(十七)</sup>	二十世紀初の印出	一五二二	不明
新旧書林本 <sup>(十七)</sup>	一九一三	一五二二	坊刻本
滙東書館本 <sup>(十七)</sup>	一九一八	一五二二	坊刻本

## 2 日本における諸本とその詳細

本節においては、筆者が国内で実際に調査をおこなった諸本を紹介する。

### (1) 写本

#### ① 佐野宏架藏本

所蔵先 佐野宏架藏  
形態事項 写本、一卷一冊、五行五字

書写者・書写年代 未詳

注記 表紙「全羅北道南原郡阿英面月山里／金栄黙／類聚：」

これまでの研究において検討されていない新出写本。五つ綴じ。三十一丁。奥付はなく、書写時期は未詳。筆跡から児童が使用した手習本だと思われる、本文の行間に落書が見られることから、子供の漢字学習のために利用された時期があつたと思われる。ただし落書と書写は別筆で、墨色から見ても時期は異なる。楮の繊維が目立つため、日本の料紙であれば十七世紀末から十八世紀のものと思われるが、朝鮮の料紙は日本のものと異なるため、年代は不明である。本文は每半葉五行、毎行漢字五字で、各字の下にハングルの訓・音が右から左へある。

## ② 京都大学文学研究科図書館苗代川本

所蔵先 京都大学文学研究科図書館（請求記号：言語2 D

40 d）

外題 類合 全

形態事項 写本、一卷一冊、四行四字

書写者・書写年代 未詳

注記 奥書「文政七年申五月廿三日 此主 朴伊原」

見返し紙 下部「朴氏函書」 右下「厭倦」

本書は京都大学文学研究科図書館所蔵の「苗代川本」と呼ばれる朝鮮語関連資料計三十三冊に属するものである。大正六年に新村出が鹿児島県日置郡下伊集院村苗代川（現在の日置市東市

来町美山）の朝鮮人帰化人の子孫から購入させた。安田章氏による研究で、今では「苗代川本」の全容を知ることができ、それは文禄・慶長の役によって薩摩藩苗代川に連れてこられた陶工達及びその後代が、母国での風習や習慣の維持を幕府から命じられたため代々使用してきた教科書等である。

本の現状としては、虫食いや墨汚れが甚だしく判読不可能な箇所も少なくない。四つの綴じ目から見ると和装本であるが、表紙と本文の紙質が違うため、所蔵館によって綴じ直されたのではないかと思われる。『類合』本文末尾の裏に同筆の六言漢詩「引青風於六月、客歸日之亦近：」がある。李康民氏がこの六言詩が本書伝来背景を推定し得る手掛かりであると、同じく苗代川伝来の写本『漂来之朝鮮人書文集』から類似する天明年間の記事を見つけて、天明年間の漂着朝鮮人（全羅道靈岩郡秋子島居住の康處斗外二十人）の帰国の際に詠まれたものと判断した。以上のように本書は天明年間の朝鮮漂人の手によって作成されたと述べる。また本文のハングル表記に韓国南部方言が反映されているので、本書の作成には南部出身の朝鮮人が関わっていたと李康民氏は推測する<sup>二七六</sup>。

本文は每半丁四行、毎行四字の漢字で、それぞれの漢字の下にハングルの朝鮮語の訓・音を付す。またしばしば漢字の左右に日本語の音・訓を片仮名で注記する。漢字の字数と内容から底本は戊申刊板本であると確定できる。本文には別筆の書き入りがしばしば見える。そして文字の左右にカナ和訓と朱で書かれた正字がしばしば見えることが注目を引く。

① 東京大学文学部小倉文庫<sup>(二十九)</sup> 藏釋王寺板

所蔵先 東京大学文学部小倉文庫(請求記号…漢籍小倉…

4852)

外題 類合

形態事項 刊本、一卷一冊、四行五字

注記 裏表紙「釋王寺藏刷板ニヨリ複寫昭和四年(一九二九)九月進平」

本書は小倉文庫所蔵三冊『類合』の中の一冊となり、一冊、四つ綴じ、四周単辺、半郭二十一・三×十五、四cm、黒口、上下内向黒魚尾、每半葉四行、毎行漢字五字。行間界線なし。裏表紙に「釋王寺藏刷板ニヨリ複寫昭和四年(一九二九)九月進平」と筆写があり、小倉進平氏の眞筆と認められる。紙質は厚く、首題はなく、一丁表では本文から始まる。文末の三十八丁裏に黒影の文字あり。版面に磨滅があるが、全体的に綺麗な状態である。漢字の字体が大東急記念文庫漢字本に甚だしく似ていて、楷書で書かれている。

奥書に「釋王寺藏刷板」とあるのが事実であれば、本書は唯一本である。現在北朝鮮の江原道に位置している釋王寺は、創建に関する明確な史料が残っていないが、高麗末期の太祖李成桂の支持で創建されたものと思われる。当時から王室の祠堂に指定され、十五世紀初めに拡張した後も勢力が拡大しつつ、朝鮮末期まで綿々と続いた。

韓国の印刷文化発達史では、寺院版が占める割合が非常に大きく、残存する『類合』の伝本でも寺院版が半数以上を占めている。林(二〇一三)は釋王寺に関わる書籍の流通や刊行事例

は、記録や実物を合わせて十六世紀中頃になって初めて確認されると述べており、具体的に十六世紀四種、十七世紀五種、十八世紀六種、十九世紀三種の計十八種に達する書籍類、仏経、仏家文集を朝鮮末期まで印刷をおこなったと述べた。

林(二〇一三)がまとめた通り、二十世紀半ばに釋王寺が全焼する前の『雪峯山釋王寺略誌』に寺院が保管していた経板と印本に関する記録の中には「経板 類合 一〇板」と確認できる。また林は経板は全て焼失したが、印刷後に信徒や他の寺院などに分与されたため、相当数の印本が残っているのが現実であると述べた。釋王寺板本『類合』はこれから出る可能性が認められる。

ともかく王室と強い関係をもつ釋王寺が印刷した『類合』の音・訓および漢字表記の規範性は民間本より強いのではない。さらには大東急記念文庫本と字体の相似度が高いところから、本書の年代も現存『類合』の大半より上る可能性が高く、『類合』研究において重要な一冊だと言えよう。

② 内藤文庫藏治洞<sup>(三七)</sup> 新板本

所蔵先 関西大学総合図書館内藤文庫(請求記号…L21

\*3\*1936)

外題 類合

形態事項 刊本、一卷一冊、六行六字

時期 十九世紀中葉

注記 表紙 右下「癸卯十一月初九影卿」

四周単辺有界、半郭縦二十二・三cm、横十七・九cm、白口單

魚尾、每半葉六行、毎行漢字六字。各字の下にハングルの訓・音が右から左へあり、首行に「類合」とある。本文は第二十二丁表第一行で終わり、第四行に「類合終」と尾題がある。首題「類合」の下にそれぞれ漢字音「유합」と違うハングル表記となる。版面は整然として、漢字はすべて楷書で書かれている。料紙は薄いが、虫食いは少なく、保存状態は良好である。

本書は内藤湖南旧蔵書であり、見返し紙に「内閣原本 御定奎章全韻」があるため、目録に本書の書誌情報として掲載されるが、本文から「奎章全韻」との関係は認められない。

孫(二〇〇八)は新出資料として『類合』治洞新板本を考察し、刊記から十九世紀中後期のものと推定した。孫(二〇〇八)が提供した書誌、漢字字数そしてハングル表記特徴が、内藤文庫蔵本に一致すると考えられる。本書は治洞新板本坊刻本に属す可能性が高い。

日本国内に現存する本書と完全一致するものとして、筑波大学中央図書館岡倉文庫旧蔵本、東洋文庫前間恭作の旧蔵本、国会図書館岡田希雄旧蔵書(請求記号わ829-1-2)、国会図書館亀田旧蔵書(請求記号829-1-R6)、書陵部図書寮蔵谷森善臣の旧蔵書等が存在する。

その中で内藤文庫蔵本が最も注目を引くのが、内藤湖南本人による書き入れである。湖南は号であり、名は虎次郎、字は炳卿であるため、表紙の「彪卿」が疑問に思われるが、同文庫蔵本に「彪卿」の落款を有する書物は少なくない。『三國史記五十卷』、『元史二百十卷』など二十部もある。また本文において、朱で標目漢字の右側にカナ注が施され、ハングル音注の上

に「音」と明示されるなど、本書を一読した跡が見える。

### ③ 東京大学文学部小倉文庫安心寺本

所蔵先 東京大学文学部小倉文庫(請求記号・漢籍小倉・4853)

外題 類合 全

形態事項 刊本、一巻一冊、五行六字

時期 十七世紀中葉

注記 刊記「昭和七年十二月十日 印刷：全羅北道全州郡安心寺藏板：佛教社韓龍雲發行」

安心寺は全羅北道完州郡にある新羅の僧侶慈藏律師が設立した寺院である。本書は四周単辺、内框縦二十一・八横十八、九、每半葉五行、毎行漢字六字。各字の下にハングルの訓・音が右から左へあり、首題はなく本文から始まる。版心は上下内向黒魚尾で、魚尾間には丁次のみがある。第二十六丁表第二行で本文が終わり、第五行に「類合終」という尾題がある。第九、十、十九、二十の四丁を欠き、版面の磨減が甚だしい。刊記「昭和七年十二月十日 印刷、全羅北道全州郡安心寺藏板、佛教社韓龍雲發行」から見ると、本書は地方の坊刻本類に属すると思われる。

東洋文庫の前間恭作旧蔵本に二冊の安心寺本があり、うちの一冊(請求記号・V11-1-37-0)は脱落が補鈔されている。前間恭作本人が補鈔をおこなったのではないかと思われる。前間恭作は一八九一年に慶應義塾大学を卒業して韓国に渡り、一九一〇年まで滞在し、日本領事館・公使館・朝鮮統監部

で勤務しながら韓国の古書を多く輸入した。旧蔵書の大部分が現在では東洋文庫に所蔵されている。白井(二〇一五)は、蔵書の中に前間自ら研究のために収集した天下の孤本と言うべき書籍もあり、旧蔵書そのものが前間恭作は当時在野研究者であったことを反映していると指摘した。

この安心寺本『類合』は東京大学文学部小倉文庫、早稲田大学図書館にも所蔵されている。小倉文庫蔵本の奥書には「全羅北道全州郡安心寺板 昭和七年十二月覆刷」との書き込みがある。早稲田大学図書館本の奥書には刊記がないが、版面から安心寺本と確定でき、同大学図書館の書誌情報には撰者は柳希春となっているが、誤りである。

#### ④ 京都大学文学研究科図書館シーボルト本

所蔵先 京都大学文学研究科図書館(請求記号:言語G5)

9)

内題 類合

形態事項 大型本、(本文) 十行十六字

刊年 一八三八

京都大学文学研究科図書館所蔵の『日本』はドイツ出身のオランダ医師シーボルトが一八三八年オランダ・ライデンで出版したものであり、紫色のハードカバーを有する大型本である。

縦三十七・三五cm、横二十九・六五cm。全書は『類合』原文(ハングル附)、漢字の付録(ハングル片仮名附)、朝鮮歌一首(ハングル附)、漢詩歌二首(ハングル附)、そして独訳『類合』(ローマ字綴)によって構成されている。表紙にラテン語の書名、

資料紹介、印刷方法、由来そして内容説明などの記述<sup>三十一)</sup>があり、裏表紙には「京都帝国大学図書館」の印がある。

『類合』本文は合計十頁、毎半頁十行、毎行漢字十六字、各字左右にハングルで音と訓を付している。孫(二〇一六)によると、この『類合』の祖本は一八三二年到北京宣教師会管区長のヒヤシンス神父が北京の朝鮮使節から得たものであり、後にシュリング男爵(Schilling von Canstadt)(一七八六—一八三七)に贈与し、シーボルトはシュリング男爵からこれを借りて使用したものと紹介した。

この『類合』の底本に関して、Osterkamp(二〇一五)は現在オーストリア国立図書館の所蔵される本とするのに対して、孫(二〇一六)は治洞新板であると推定する。後に孫(二〇二〇)はオーストリア国立図書館蔵『類合』の収録字数(千五百十二字)と個々のハングル訓から、諸版本の中で治洞新板の修正復刻本が一番近いと指摘した。しかし版面の磨滅状態を見ると、治洞新板がオーストリア国立図書館『類合』を底本にして修正し、復刻した可能性もなくはないと推測した。

石版印刷のための清書はシーボルトの中国人秘書、郭成章(Ko Tschang Dschang)がしたのだが、ハングル訓の間違いが少なくないと孫(二〇一六)は指摘する。ただ筆者が見る限り、本文の漢字字体は治洞新板系と一致し、表紙「合類」の「類」字のみ俗字体「類」になっていることが、表紙の清書は中国人郭成章の手によるものではないことを示すと考えられる。

国内では九州大学中央図書館(請求記号:629/S/12)にも所蔵されている。



⑤ 東洋文庫蔵乎隱齋藏板本

所蔵先 東洋文庫（請求記号…VII—1—36—2）

外題 類合

形態事項 刊本、一巻一冊、五行六字

時期 十八世紀中葉—末葉？

本書は一冊二十六丁、四周单边、每半葉五行、毎行漢字六字。各字の下にハングルの訓・音が右から左へあり、首行に「類合」を大字で表示し、各字の中央部にはハングル「류합」で漢字音を表している。同行下部に「乎隱齋藏板」の印がある。漢字は太めの楷書で書かれている。

全羅南道乎隱齋で十八世紀中期から末頃にかけて刊行したと朴氏が記した。通常刊本の千五百十二字にない四十二文字が追加され、合計千五百五十四字が収録されている。刊行者の意図によって字数が増加されたと見える。本書表紙の右下「前間氏所蔵」と記された張り紙があり、同じく前間が収集した板本と見なすことができる。

⑥ 東洋文庫蔵武橋刊本

所蔵先 東洋文庫蔵（請求記号…VII—1—36—1）

外題 類合 完

形態事項 刊本、一巻一冊、六行六字

時期 十九世紀中葉

本書は一冊二十二丁、四周单边、半郭二十一、四×十七、八㎝、每半葉六行、毎行漢字六字。各字の下にハングルの訓・音が右

から左へあり、首行に「類合」を大字で表示し、各字の中央部にはハングル「류합」で漢字音を表している。版心は上下黒魚尾で、版題は「類合」となっており、数字で葉数を表示する。本文は第二十二丁表第一行で終わり、第六行に「類合終」という記述がある。そして同第四、五行の下部に二行に亘って「武橋／新刊」と刊記がある。漢字は楷書で書かれている。

「武橋」は大韓民国ソウル市内の地名。ソウル周辺では十八世紀末頃に商人たちが営利目的で本を刊行した。いわゆる「坊刻本」で、薄利多売のため、形態から素材まで粗末である。中央地域の坊刻本は官版とは質がまったく異なるが、地方の坊刻本よりは状態が比較的良好。坊刻本は主に木板や活字印刷で、朝鮮後期の読書人口の拡大による図書の需要に応じて、児童用教材や礼儀書などの実用書を多く刊行した。朴氏と孫氏は、正確な刊行時期はわからないが、表記形態から見ると十九世紀末で近代方言だと推測する。

筆者が調査した限り、東京大学文学部小倉文庫（請求記号…漢籍小倉・4854）そして龍谷大学（請求記号…221・08／チャム—C／9）にも『類合』武橋刊本が所蔵されている。東洋文庫蔵本の裏表紙に「昭和十六年九月一日 幣原坦（三十一）殿惠賜 東洋文庫」という記述がある。東京大学文学部小倉文庫蔵本の裏表紙に「本書ハ徐四佳ノ作ナリト傳フ」の付箋貼り込みがある。

また筆者が所蔵する一冊を始め、版面、字数そしてハングルの訓から考察すれば武橋刊本と同一板木を使用したと判断されるが、刊記に「新刊」のみ記された『類合』が存在する。この類の『類合』は国会図書館（請求記号…853—5）と早稲田大

学図書館特別資料室加藤諄旧蔵（請求記号…文庫 24 A0469）等がある。

### 3 日本人が関わった『類合』類

#### （1）東洋文庫蔵行智本『千字類合』

#### ① 書誌

本書は東洋文庫岩崎文庫の貴重書（請求記号…三一E—24）であり、「国語」の分類に属す。一卷一冊の筆写本、大和綴、每半葉四行、毎行五字計千五百十二字を収録した善本である。表紙には『千字類合』と記されているが、内容は朝鮮本『類合』であり、後述する具原益軒著『千字類合』とは全く異なる書物である。筆者は行智という人物であり、索引が付されている。

裏表紙にはハングルの子音と母音、および子音と母音の組み合わせのハングル字母を「初終聲」「初聲」「中聲」「初中聲合用作字例」そして「初中終三聲合用作字例」と一覽に書いている。各ハングル字母の左と右にはカタカナで発音が記載されているが、カナ注はハングルの発音とかけ離れているところがあり、特に有気音と無気音、濁音と清音の表記に相違があるところ、そして現代では消えたハングルを記録したのが注目をひく。

本文は三十八丁表までだが、欠葉がある。一丁表の右下に「木村正辞図書」<sup>三十三</sup>の蔵書印がある。各漢字の下に左から右へとハングルで音・訓を示している。三十九丁表から「千字類合検査索引」が続く。内容は題目の通り、本文収録字を筆画数で検査できる索引であり、各字の下に丁数が裏表と表示される。

奥書に本書の由来を紹介した記述が見える。①「朝鮮千字類合一卷ノ司天臺足立信順<sup>三十四</sup> 蔵本ヲ以テ書寫シ且檢尋ニ便セムガ為ニ画引目安ヲ加フル者也時ニ文政二年己卯五月廿二日ノ聲明書院ニ記スノ實國創學行智」②「天保十一年庚子初秋購求ノ得之於北峰梅塢老人<sup>三十五</sup>」と記す。行智という人物が文政二年に足立信順所蔵本を書写した本書が、天保十一年に某氏に行智の門下生荻野八百吉から買われた経緯がわかる。

奥書に続いてハングルの発音特徴と四声の関係を記す…①「平聲哀而安ノ上聲音厲而舉ノ去聲清而遠ノ入聲直而促ノ諺解亦同」②「平上去入如人自平地升上行去還入之意。四十丁表にこれに続くハングル声調の記録が見える…①「ㄱカク角ノ初」②「하ハク鶴ノ終」③「가カギキユクケケケコトイテイホイ」④「凡字音高低皆以字傍點之有無多少為準ノ平聲無點ノ上聲二點ノ去聲入聲皆一點」

#### ② 行智について

行智は『国史大辞典』『佛教大辞彙』などによれば、江戸時代後期の修験者で、安永七年（一七七八）に江戸浅草福井町に生まれた。著述も少なくなく、もつとも力を注いだのは悉曇学で、旧来の習弊にこだわらず、語学としての要点を明らかにすることに努めた。著書に『校本悉曇字記』一卷、『悉曇字記真積』など特に悉曇学に関するものが多い。門下には荻野梅塢等がおり、親交があったという。

行智が本書を書写した後は、本来の識字教科書としてではなく、むしろハングルのテキストとして使用したと推測できる。

修験者として真言經典を読むために悉曇音を習得し、そして漢字音に興味を持ったと推察され、本書に見える書き込みから、相当研究熱心であったことが感じられる。

行智の音韻学研究に関しては渡邊英明『行智師の音韻研究概説』(上・下)に詳しい解明があり、渡邊氏によれば行智は僧侶の中で音韻学研究が勃興した時代に生き、その中で行智は早くも悉曇音韻が国語音韻と関係あることに気づき、三十九歳の年に著した『字記真釈』において、朝鮮字音、漢字音(韻鏡研究)、西藏字音、蒙古字音などと悉曇字音の対訳音韻研究を縦横無尽におこなっている。

## (2) 東京大学文学部国語研究室蔵松澤本『千文類合』

### ① 書誌情報

本書は東京大学文学部国語研究室(請求記号…5D・19)に所蔵されており、一巻一冊の筆写本であり、縦二十七cm、横二十cmの大和綴本である。每半葉には四行あり、各行には六字ずつ、計千五百十二字が収録されている。状態は綺麗であり、表紙は朝鮮本よりも明るい黄色の紙が使用されており、厚手の楮紙と思われる。袋綴じの中には、所々に枯れ葉が挟まれていることが確認される。

『千文類合』本文は三十八丁表までで欠葉がある。三十八丁裏から「文政二年己卯五月十八日/以足立信順手寫之本書寫之了實國創學行智」と奥書があり、三十九丁表には「天保七年丙申五月訪行智阿闍梨/談話次及朝鮮國古今之字/出嘗自寫所秘藏千文類合一本示予/則請之所寫也/松澤義章」「足立信順ハ

司天台ノ官人也」とある。表紙右肩に「唯一本而已」と墨書がある。本書は松澤義章が模写したものと推測でき、また丁数等の書誌情報と合わせて、上記東洋文庫行智『千字類合』は本書の祖本であることが確定できる。

各漢字の下に左から右へとハングルで音・訓を示し、音と訓と区別するために朱で縦線を引いている。これは他の刊本と写本に見えない特徴で、松澤義章が朝鮮語母語者でないため線を引いたのか意図が不明である。墨で欠落部分を円形に描いた箇所がいくつかある。ハングルの書き方には少しおかしな部分があり、松澤義章はおそらくハングルに未熟であった。ただこの写本は原本行智本『千文類合』の様子を保っていると思われる。

この書物は東京大学文学部国語研究室で貴重書とされるが、これまで言及されず、上記行智本について東洋文庫の目録に誤記があるため、本書の祖本であることも知られていなかった。

『千文類合』の祖本となる行智本の底本として、司天台足立信順が所持していた『類合』が存在したという事実は、朝鮮の書物である『類合』が、貝原益軒や朝鮮人以外の経路を通じて日本に伝わったことを証明するものである。

### ② 成書経緯

文政・天保に一般の研究者は写本一冊を入手する為にも奔走せざるを得ない状況があった。『千文類合』の奥書に「：訪行智阿闍梨/談話次及朝鮮國古今之字/出嘗自寫所秘藏千文類合一本示予/則請之所寫也：」あるように、本書の成書のきっかけは阿闍梨行智と松澤義章が「朝鮮国の古今字現象」に関心を持っていたからだ。

「古今字」とは、東漢の鄭玄によって初めて用いられた<sup>(三六)</sup>、

訓詁学の用語として、同じ用語が違う時代の文献において漢字表記が異なることを説明する際に使用されるようになった。ただし、「古」と「今」は動態的な概念であるため、清代までにならんと学者によって解釈が様々に見える。

ここでいう「朝鮮国古今之字」は、ハングルを指す可能性もあるが、前述したように松澤義章の手書きのハングルに未熟さが見られるため、「訓民正音」を文字学的に探求する高度な能力は松澤に備わっていたとは言い難いと感じる。

一方、当時の日本では、御家流の多用や中国由来の漢字規範の衰弱などにより、社会で一般的に使われる漢字の形が多様化し、「異体字現象」が急増した。学者や僧侶の間でも異体字について広く議論していた。本書に収録されている漢字には、当時の日本の文字生活から見て「異様な」漢字いわゆる異体字に思われるものが含まれていたと考えられる。

前節で紹介したように、朝鮮における『類合』の編纂と刊行については、中央で厳密な校正がおこなわれた形跡がなく、学習者への配慮や教える側の都合によって諸字間の字体に不揃いのもものが多くある。それでその特徴が日本の学者の目にとまり、考察する対象となった。ただし、「朝鮮国古今之字」が文政・天保年間に観察できた朝鮮半島の古今字現象を指すのか、あるいは日本と朝鮮の用字の違いを指しているのかは、同時代の文字資料を使用してさらに検討する必要がある。

また、行智と松澤義章がどの字を「古今字」と認識し議論をおこなったのか、非常に興味深いところだが、この書物からでは残念ながら知る由もない。

### (3) 貝原益軒『千字類合』

#### ① 書誌と出版情報

貝原益軒には全集や著作目録に収録されていない『千字類合』(一六九二)という著書がある。本書は『類合』をもとにしており、藤本(一九九六)は確認できる『類合』諸本のうち旧本系統本を底本にしたものと推定している。

筆者が調査した『千字類合』漢検漢字文化研究所蔵本は木板、四周双辺、内框縦二十二・三cm横十五・〇cm、有界四行八字、内題に「朝鮮國正本」とあり、巻頭は「千字類合 叙」「千字類合 目録」に続いて本文がはじまる。標目漢字に対して右側に漢字音、左側に訓読がある。右下に訓読符号、そして左下と右下に連読符号が付された標目漢字もある。題簽はなく、元表紙に「朝鮮國正本 千字類合 雒陽書林躍鯉堂藏板」と三行で書かれている。藤本(一九九六)によれば、本書には初刊本の雒陽書林躍鯉堂藏版(濱田敦氏旧蔵本)、覆刻本の浪華書林醉墨齋藏版(大阪府立図書館蔵本と龍谷大学蔵本)、そして十九世紀前半の後印版書肆尚書堂堺屋仁兵衛製本(東京大学総合図書館蔵本)の三種が存在し、いずれも雒陽書林日新堂初刊本の板木を使ったが、板元によって広告に後述する「貝原翁門人鶴原君玉訓點」や「貝原先生書」などの句が記載されることもある。松澤老泉<sup>(三七)</sup>の『経籍答問』に「享保中御官刻」という記録がある。もし官版に刊行されたのが事実であれば、『千字類合』の位置付けと実際の流布状況を具象化できる記録となる。

『千字類合』刊本の分布は比較的多く、今でも古書市場に出ることがしばしばある。筆者が各目録、データベースで検索し

た結果は、初刊本の雒陽書林躍鯉堂藏版は現在漢検漢字文化研究所、東北大学附属図書館本館、筑波大学附属図書館中央図書館、重山文庫、三次市立図書館、ハーバード燕京図書館に一冊ずつある。覆刻本の浪華書林醉墨齋藏版は大阪府立中之島図書館と龍谷大学禿氏文庫以外、書陵部図書寮文庫の谷森本に一冊あり、国会図書館東京館に一冊あり、また早稲田大学図書館に二冊がある。そして十九世紀前半の後印版書肆尚書堂堺屋仁兵衛製本は、東京大学総合図書館以外に、鳥取県立図書館にも一冊ある。他は未調査のため刊本の確認はできないが、以上からも国内に広く流布されたことがわかる。

また筆者が資料を調査する中で、本書の写本が存在することに気づいた。東洋文庫にもそれが一冊あるが、前述したように行智筆写の『類合』にあたり、貝原益軒『千字類合』ではない。

学習院大学図書館所蔵の『彫虫居写本』の中に、『千字類合』の写本がある。『彫虫居写本』は佐藤硯湖が収集したさまざまな種類の文章を集めたものだと推察される。同書には「四時讀書樂」と「本朝三字経」の写しも収録されており、それぞれ異なる筆跡で書かれている。九丁表から三十丁裏にかけて『千字類合』の本文となり、無辺、每半葉五行、毎行漢字八字。三十丁裏の『千字類合』本文が終わるところに、左下に「明治二十年一月中旬寫佐藤其三」の記述があるが、原本刊本の叙文も刊記もなく、本文框外に各部門の名称が記されている。すべて漢字で書かれており、仮名の注記はない。漢字の書き方は初刊と大きな違いはなく、運筆上の癖や若干の間違いがある程度である。<sup>三十八</sup>

さらに東京国立博物館にも『朝鮮千字類合』（文政二年写）

一冊があるが、未調査のため、今後の課題とする。

## ② 成書経緯と特徴

十五世紀から朝鮮半島で広く使われてきた識字教科書『類合』が貝原益軒の目にとまり、字数を増やし、二十四類に分ける形となった。最初から最後まで刊行期間を見ると、約二百年間に渡って日本の寺子屋などの初等教育機関で教科書として使われていた<sup>三十九</sup>。オリジナルの朝鮮版を日本版に修正するにあたって、益軒が標目漢字の字体を置換した事実は見えてこない。この点について楊慧京（二〇二二）において詳細を述べており、そちらを参照されたい。

貝原益軒は序文で『類合』の収録内容と漢字の難易度を評価し、「頃偶觀韓人所輯千字類合／其所編錄皆是民生日用之文字而／自乾坤至物態／各以類相合……」と述べるが、『類合』にあるはずのハングルによる字音と字訓を付すことについて言及しておらず、そこから考えれば貝原益軒が参照した『類合』は漢字本でなかったかと考えられる。朝鮮通信使と交流があり、またしばしば黒田藩に朝鮮から来た漂流民との筆談に行かせられた貝原益軒は、朝鮮の書物を手に入れる機会は少なくなかったと思われる。藩儒時代から字学に興味を持ち、晩年に至って漢字の字体に独自の規範意識まで持った益軒が朝鮮半島の漢字学に関心を持ち、自ら『類合』を求めた可能性はないとは言えない。

## (4) 他形態の貝原益軒『千字類合』

貝原益軒本人の字体規範意識と漢字教育思想が反映された本書は、全集などに収録されないものの、往来本などの形として明治まで活用された証拠がある。  
紙面の制約により、ここでは箇条書きにして書誌情報を紹介する。

① 豊橋市中央図書館蔵往来本『類合千字文』

外題 類合千字文

所蔵先 豊橋市中央図書館（請求記号：031/25）

形態事項 刊本、一巻一冊、縦八cm横十九cm、八行四字

時期 文政三年

② 明治版『類合千字文』

外題 類合千字文 小泉松塘書

所蔵先 東書文庫一冊（デジタル請求記号：DIG-1TS

HB-1893）

早稲田大学図書館二冊（請求記号：ト02 04

575 B216）

（請求記号：ト02 04

575 B202）

形態事項 刊本、一巻一冊、四行六字

時期 明治三十八年

注記事項 行書。付「訓点付千字文」。

4 『類合』の日本の受容と認識

『類合』は十七世紀末に日本に伝来し、貝原益軒によって日本に適した識字教科書に改編され、その後二百年以上にわたって使用されてきた。オリジナル朝鮮本は朝鮮人が暮らす地域でも、漢字入門書として広く使われた。日本の国語学者たちも、本書に興味を示し、行智師のように朝鮮漢字音とハングルの習得教材として使用した者もいれば、松澤義章のように漢字の字体から本書にアプローチした者もいた。また、時代が下るにつれて、明治前後の韓国と関わった官僚や学者にとっては欠くべからざる一冊であった。

しかしながら、現在では、『類合』が『新增類合』の略称であるという誤解が韓国語学の研究者以外の方にはしばしば見られる。このような混同が起こる原因としては、『新增類合』の作者である柳希春の日本の韓国思想研究における高い知名度や、先行研究における諸本整理の用語が曖昧で統一されていないことが挙げられるのではないかと、檀国大学刊行本『新增類合』が国内の図書館に広く所蔵されていることも認識に差が生じた原因の一つであるかと思われる。

終わりに

『類合』は名前の通りに「文字と語彙を類別して総合する」書物である。

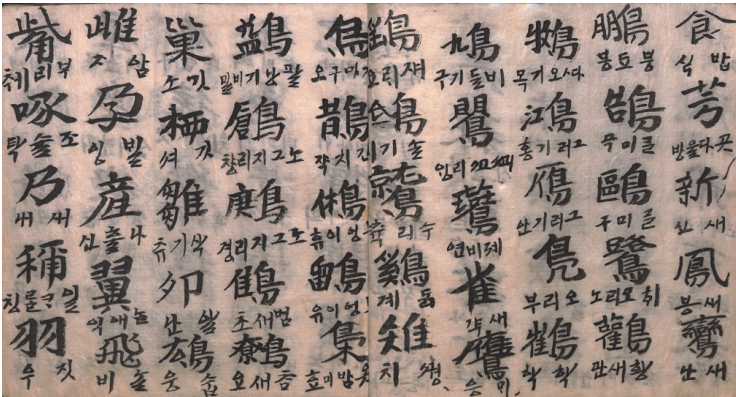
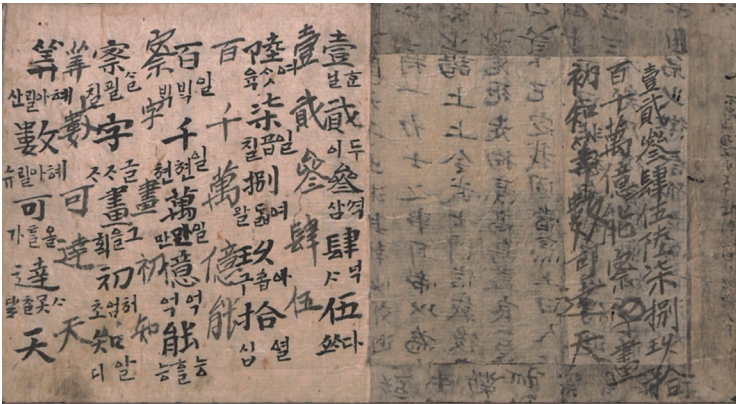
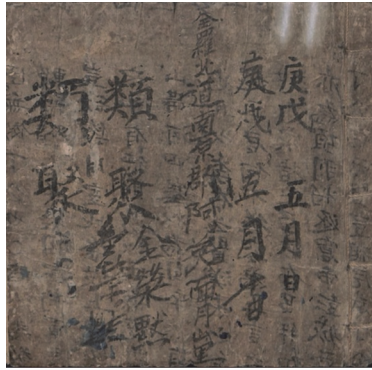
朝鮮で作られた漢字初学書は、日常生活での漢字を覚えるというより、四書五経などの中国語文献を読解するための入学書という性質が強く、おそらくそちらが主流だった。それに対して日本の場合、漢字Ⅱ和訓Ⅱ日本語語彙という関係から、必

要な漢字が日常での頻用語彙と重なり、漢字を選ぶというよりは日本語語彙を選別するところに重点を置かれた。この相違の中で、『類合』が海を渡って伝来し、日本に受容されたことはまことに興味深い。

本稿は日本の各地に所蔵される『類合』に関する状況をまとめてきた。さらに『類合』から派生した『千字類合』、『類合千字文』そして『千文類合』の書誌を考察し、日本人が本書へ関心を寄せた理由を考察した。

このような漢字教科書は、作られた時代に応じた文字表記、特に漢字の字体の変遷を示している点で、韓国語研究及び日本語研究に資する重要な語学資料であるとともに、東アジア漢字文化圏における漢字発展史の一環に位置するものとしても注目される。

本稿における新出『類合』の系統整理、また『千字類合』と『千文類合』の関係や、ハングルと仮名の字訓と漢字音などについては、また改めて検討したい。





非公開

非公開

非公開

(2) ① 東京大学文学部小倉文庫藏釋王寺板

非公開

非公開

(2) ③ 東京大学文学部小倉文庫安心寺本

非公開

非公開



(2) ⑥武橋刊本 (楊慧京架藏本)

非公開

非公開

非公開

非公開

非公開

非公開

非公開

非公開

非公開

(4) ② 明治版『類合千字文』東書文庫蔵本

非公開

非公開

非公開

[注]

- (一) 後述するように『類合』が存在した形跡は十六世紀初めまで遡及されるが、初刊本が未発見なので刊行年代が未詳とされている。
- (二) 朝鮮前期学者の崔世珍が一五二七年に刊行した漢字教科書。上・中・下の三巻構成、各巻に千百二十字ずつ合計三千三百六十字が収録されている。実字を多く収録し、従来の漢字教科書より実用的価値が大きいと評価される。
- (三) 柳希春(一五二三年—一五七七年)・朝鮮時代の文臣。字は仁仲、号は眉巖、死号は文節。全羅道觀察使、吏曹參判などを歴任。經史と朱子学の造詣が深く、『眉巖日記草』、『朱子語類箋解』、『詩書釈義』などの著書を残した。
- (四) 朝鮮前期の文臣柳希春が一五七六年に『類合』を増補・修正し、ほぼ倍の字数三千字を収録し編纂した漢字入門書。序文と跋文で、従来の『類合』に必要な漢字が多く漏れており、また尊仏排儒の内容があるから編纂に至ったという。
- (五) 阿辻哲次(二〇〇九)『漢字文化の源流』、丸善株式会社、一〇八頁
- (六) 既に同時代の知識人にこの評価をされた。「千字／梁朝散騎常侍周興嗣所撰也／摘取故事／排比為文則善矣／其在童稚之習／僅得字字而已／安能識察故事屬文之義乎：雖曰類合諸字／而虚多実少／無從通諳事物形名之実矣」(崔世珍『訓蒙字会』引)
- (七) 安秉禧、一九九二・四〇九頁
- (八) 徐居正(一四二〇—一四九二年)・字は剛仲、四佳亭と号した。
- (九) (二七六—一八三六)朝鮮後期『經世遺表』、『牧民心書』、『与猶堂全書』など著した儒学者、実学者である。朝鮮後期実学思想を大成した人物と評価される。

(十) 凡若此類／蒙稚無知何以辨矣／聚而類之／則互相眩惑／散而乱

之／則互相眩惑／余曰／周興嗣千字文／不如徐居正類合

(十一) 오세현(二〇一八)、『화정(華政)』과 「유합(類合)」, 서울학연구(七〇), 一〇一—一三九

(十二) 「:此蓋古臣名徐四佳集字之文／而実初学指南之書也／:不

肖孫重福七十一歳／拜手敬跋:」

(十三) 朴亨翌(二〇〇四)『韓國の辞書と辞書学』、ソウル、ウォル

イン(六一頁)

(十四) 藤本(一九九〇)「:筆者はその成立年代を十五世紀中葉の

文隆隆昌の時期と推量するが、これは『類合』の撰者に徐居正を擬す伝承にも合致する。:」

(十五) 安秉禧(一九七二)『新增類合 解題』、『影印新增類合』、檀

国大学東洋学研究所

(十六) 「江戸時代前期の儒学者、本草家、庶民教育家、筑前国福岡

藩士。(中略)名は篤信、字は子誠、通称ははじめ助三郎、二十

六歳で剃髪して柔斎と称すること十余年、結婚し蓄髪してのち藩

主より久兵衛(祖父の通称)を賜わった。以後損軒と号し、晩年

致仕後に益軒と改めた」(『国史大辞典』参照)。本稿では、読者の

便宜を考え、あえて「貝原益軒」と「益軒」を使用することにす。

(十七) 元禄五年に貝原益軒が著した識字教科書。初刊本の雉陽書林

躍鯉堂藏版、覆刻本の浪華書林醉墨齋藏版と十九世紀前半後印版

の書肆尚書堂堺屋仁兵衛製本の三種が存在する。

(十八) 道林寺冊板、五行八字(崔(一九九三)四七頁)

(十九) 十八世紀初葉或は末葉? (崔(一九九三))

(二十) 十八世紀? (崔(一九九三))、全羅南道方言反映(朴(二〇〇四))



(二十一) 焼失

(二十二) 全羅南道方言反映 (朴 (二〇〇四))

(二十三) 十九世紀末 (朴 (二〇〇四))

(二十四) 増字・(俄作) 虧乏甚少 破砕(類壞潰裂) 乎隱齋藏板本の

字音と字訓に相似 (朴 (二〇〇四))。

(二十五) 藤本 (一九八六) 提起

(二十六) 朴 (二〇〇四) 提起

(二十七) 編輯兼発行者：高裕相 字音と字訓が武橋新刊本に相似 (朴 (二〇〇四))。

(二十八) 李康民 (一九九四)、「朝鮮資料による日本語の史的研究」  
単行本、ソウル大学中央図書館蔵

(二十九) 一九三三年から一九四三年まで、東京帝国大学言語学科の  
教授を勤めた小倉進平氏のご遺族から寄贈された蔵書。そのうち  
線装本は東京大学文学部「漢籍コーナー」に、そして洋装本は言  
語学研究室に保管されている。

(三十) 現在ソウル市の西側に位置し、十九世紀中頃に営利目的の坊  
刻本の印刷がおこなわれ始めた。

(三十一) 原文(で)行替えを示す：<sup>(付2)</sup>合類(ULUI HO, sive/

VOCABULARIUM SINENSE IN KORAIANUM CONVERSUM;/  
Opus Sinicum origine in peninsula Korai impressum/IN LAPIDE  
EXARATUM A SINENSIKO Tsching Dschang/ET REDDITUM  
CURANTE/Ph. FR. DE SIEBOLD/(Amexa appendice vocabulorum  
Koraiorum Japonicorum et Sinensium comparativa)...

筆者概訳：合類／ULUI HO／または／中国語から朝鮮語への語  
彙／元々は朝鮮半島で印刷された中国書／中国の石版／郭成章／  
現在返還／フィリップ・フランツ・デ・シーボルト／(日本語と

中国語の朝鮮語を比較する付録を添付) …

(三十二) 幣原坦 (一八七〇—一九六三) …「明治から昭和時代にか

ての学者、教育行政官。鹿児島造士館教授を経て山梨県立中学校

長・東京高等師範学校教授など歴任、ついで韓国政府学部学政参

与官、文部省視学官兼東京帝国大学教授、広島高等師範学校長お

よび文部省図書局長など、官庁中心に歴任した。著書に前記『南

島沿革史論』のほか、植民地教育の展望を示した『朝鮮教育論』

『殖民地教育』および『南方文化の建設』などがある。』(『国  
史大辞典』)

(三十三) 「号欄斎。大正二年四月十一日没、年八十七。下総成田の  
人。伊能類則・岡本保孝に学び、東京帝大教授となる。万葉研究

家。』(『近代蔵書印譜』)「蔵書家で中国で散逸した書籍を収集し、

現在その一部は東洋文庫に架蔵されている。』(国立国会図書館「近

代日本人の肖像」)

(三十四) 足立信順 (一七九六—一八四一) …「江戸時代後期の曆算家。

寛政八年生まれ。父信頭に教えをうけ、幕府天文方見習となり、

星鏡儀をはじめ製作した。著作に「由刺奴斯(ユリウス)表」な

ど。』(『日本人名大辞典』)

(三十五) 荻野八百吉 (一七八一—一八四三) …「江戸時代後期の武士。

天明元年生まれ。幕臣。天守番をつとめた。仏教学者として知ら

れ、とくに天台宗に精通して寛永寺の僧らにおしえた。『統徳川

実紀』編修に参加。天保一四年五月十五日死去。六十三歳。名は

長董長。字は元亮。号は梅塙、蛇山病夫。』(『日本人名大辞典』)

(三十六) 「予一人」『礼記』曲礼下)「鄭箋／余予古今字」

(三十七) 松澤老泉：江戸後期の江戸の書肆、和泉屋庄次郎の二代目。

名は麦、字は土屑。号は成楊・老泉など。書肆として当時のベス

トセラ「先哲叢談」など一四〇点あまりを出し、また著名な学者とも交流して、自らも研究をおこなった。著に「経籍答問」「彙刻書目外集」など。寛政元々文政五年(一七八九〜一八二二)、『日本国語大辞典』

(三十八) 全編の前半はきれいな筆跡だが、後半はだんだんと乱雑な字になっていく。一部の文字は、筆の力を入れすぎて墨の点が大きくなり、判読不可能となっている。

(三十九) 尾形裕康(一九九八)、『我国における千字文の教育史的研究 本文編』大空社：一七四頁

〔参考文献〕

〈日本語文献〉

阿辻哲次(二〇〇九)『漢字文化の源流』丸善株式会社  
李康民(一九九四)『朝鮮資料による日本語の史的研究』ソウル大学中央図書館蔵

尾形裕康(一九九八)『我国における千字文の教育史的研究』大空社  
Sven Osterkamp(二〇一五)「シーボルトの朝鮮研究——朝鮮語関係の資料と著作に注目して」『国際シンポジウム「シーボルト

が紹介したかった日本」報告 ポーフム・ルール大学所蔵の  
シーボルト・コレクシオン』

白井順(二〇一五)『前問恭作の学問と生涯：日韓協約の通訳官、朝鮮書誌学の開拓者』風響社

藤本幸夫(一九八六)「朝鮮童蒙書——漢字本『類合』攷、附影印」

『富山大学人文学部紀要』(十一)

——(一九九〇)「朝鮮童蒙書漢字本『類合』と『新增類合』について」『アジアの諸言語と一般言語学』三省堂

安田章(一九六六)「苗代川の朝鮮語写本類について——朝鮮資料との関連を中心に」『朝鮮学報』三十九・四〇)

楊慧京(二〇二二)「貝原益軒『千字類合』の字体規範と『字彙』——字体の置換を切り口に」『日本漢字學會報』第四号(渡邊英明(一九三七)「行智師の音韻研究概説」『密教文化』六十一)

(一九三七)「行智師の音韻研究概説(下)」『密教文化』六十二)

「近代日本人の肖像」国立国会図書館：

<https://www.ndl.go.jp/portrait/datas/66> (二〇一三年三月十六日参照)

『近代蔵書印譜』中野三敏編(『日本書誌学大系』青裳堂書店、一九七八)

『国史大辞典』国史大辞典編集委員会編、吉川弘文館、一九七九—一九九七

『日本国語大辞典 第二版』小学館、二〇〇〇—二〇〇一  
『日本人名大辞典』講談社、二〇〇一

『佛光大辞典』龍谷大學編纂、富山房、一九七二—一九七四

〈韓国語文献〉

筆者注：著者は漢字及びカタカナに変換、文献タイトル等は原表記に従い、必要に応じて日本語訳を付す。配列は年代順。

方鍾鉉(一九六三)『一簣國語學論集』ソウル：民衆書館

李基文(一九七二)『訓蒙字會研究』ソウル：서울대학교출판부

安秉禧(一九七二)「新增類合 解題」、『보신전서류합』(影印新增類合)』

한국대학교동양학연구소

安秉禧(一九九二)『國語史資料研究』ソウル：학과 知性社

崔世和 (一九九三) 『漢字 教本 三書 研究』 ソウル・太學社

藤本幸夫 (一九九六) 『日本刊本《千字類合》에 對하여』 (『이기문

교수정년퇴임기념논총』, ソウル: 신구문화사

朴亨翌 (二〇〇四) 『한국의 사전과 사전의학』 (韓國의 辭書와 辭書學、

ソウル: 도서출판 월인)

孫熙河 (二〇〇八) 『治洞新板《類合》에 대하여』, 한중인문학회

국제학술대회)

———— (二〇一六) 『지볼트 간행 『類合 LUHÖ』 연구』 (シーボ

ルト刊行 『類合 LUHÖ』 研究、水原: 『書誌學研究』六十

八)

———— (二〇二〇) 『오스트리아 국립 도서관 『유합』 연구』 (オ-

ストリア 国立図書館 『類合』 研究、光州: 『인문사회 21』

林基榮 (二〇一三) 『安邊 釋王寺 간행 판본의 서지적 연구』

(安邊釋王寺刊行板本の書誌的研究)、水原: 『書誌學研究』

五十四)

오·세히ョン (二〇一八) 『화정 (華政) 과 《유합 (類合)》 (華

政と類合)、ソウル: 『서울학 연구』 七〇

〔付記〕

本稿は二〇一九年十一月八日に開催された「東アジア古典学の方法

第58回 次世代ロンド(25)」の発表に基づいて修正したもので

ある。発表時に頂いた多くの御意見に深く感謝するとともに、『類合』

等の画像データを御送付くださった李賢熙教授、朴鎮浩教授ならびに

図版の掲載を御許可くださった関係者の方々に厚く御礼申し上げる。

(よう けいきよう・本学大学院人間・環境学研究所博士後期課程)